

# 第一一一号に寄せて

吉見 孝夫

第一一一号をお届けします。

今号は、主に明治期の雑誌に偶々載せられたイソップ寓話を探し出しました。いわば活字の畑に落ちていた落ち穂を拾い集めたものです。

「前号で遠藤潤一先生のお名前があつて驚いた」という声が届きました。小誌の声価を高めることができたと喜んでいます。皆様にも「是非投稿を」と呼びかけたいところですが、一本でも多く査読付きの論文を求められる昨今の研究事情のなかではとてもお誘いできません。前号の小論『もとかしわ』所収の古活字版『伊曾保物語』で触れた、語頭のワを「は」で表記することに關し、遠藤邦基・前重山文庫長からコメントをいただきました。御自身の御研究には一言も触れていませんが、「誤った回帰—『はらは（私）』『はたる（渡）』』（『国語表記史と解釈音韻論』—和泉書院、二〇一〇年七月—所収）という御論考のあるのを思い出しました。いわゆるハ行転呼音と無関係のア行・ワ行音をハ行の仮名で表記する誤った回帰に「雅」や「莊嚴」を感じ取る尚古思想を見るというものです。御論考にはこの種の例が博搜されています。そういえばかつて「シクラメンのかほり」

（歴史的仮名遣いならば「かをり」という歌があります）。これなどもその好例ではないでしょうか。

その小論では二つの大きなミスを犯してしまいました。一つは無刊記第四種本の字高を「二〇センチ前後」と書いた誤りです。正しくは「二三センチ前後」です。

それでこそ『もとかしは』貼り込みの『伊曾保物語』と体裁が一致することになります。他の一つは、無刊記第二種本・同第四種本・同第七種本、寛永一六年刊第一種本・同第二種本を引用いたしましたが、これら諸本の所蔵館である天理大学附属天理図書館の許可を得ていなかったルール違反です。事後となりましたが、同図書館からお許しをいただきました。研究に従事する者として弁解の余地もない非礼をお詫びするとともに、御海容に深く感謝申しあげます。

奥付に記していたメールアドレスを変更いたしました。これまでのは使っておりませんので、ご連絡は必ず左記のアドレス宛にお願いいたします。

yoshimi.takao28@gmail.com